

紹介

佐治家文書研究会編

佐治重賢氏所蔵

『小堀政一関係文書』

小堀政一（遠江守・遠州）は、天正七年（一五七九）近江国坂田郡小堀村の生まれ、はじめ豊臣氏に仕え、関ヶ原の戦い以後は徳川家康に従って国奉行・代官等として近世前期政治史に重要な足跡を残した武将・政治家である。また古田織部門下で遠州流茶道の祖として、あるいは内裏・女院御所や伏見城をはじめとする建築・造園家としても著名な人物である。

本書は、藤井讓治・藤田恒春・横田冬彦・鈴木則子の四氏よりなる佐治家文書研究会により、佐治重賢氏（滋賀県東浅井郡浅井町木尾）所蔵文書のうち、小堀政一関係文書一六六点を翻刻・収録したものである。佐治家は中世以来の土豪の系譜をひき、江戸時代には村役人を勤めていた家である。ここに多数の小堀政一関係文書が伝来した事情について、本書解題によれば、小堀氏

は元和五年（一六一九）所領を備中から近江国に移され、浅井郡小室に陣屋を置いた。佐治家が村役人を勤めた木尾村は小室陣屋に近く、小堀家家臣との交流も密で金子の用立てや藩への大名貸的なことも行なうなど親密な関係を有していたが、天明八年（一七八八）小堀氏が改易となったことから、政一関係文書を含む藩文書の一部や道具類などが佐治家に引き継がれたものと推測されている。

この佐治家伝来小堀政一関係文書は、茶道関係者の間では早くから知られていたが、一九六二年に東京大学史料編纂所が調査・撮影し、「佐治重賢氏所蔵文書」（写真帳二冊）として同所に架蔵されたことにより、近世史研究や建築史研究等において広く注目・利用されるようになった。高木昭作「幕藩初期の国奉行制について」（『歴史学研究』四三一号、一九七六年）をはじめとし、この史料を用いた研究はすでに多く発表されている。

一方、本書編纂者の藤田・横田の二氏は、上記東大史料編纂所架蔵写真版文書の原本確認のために一九八〇年に佐治家を訪れたことを契機に、その後三年にわたり同家文

書（藩・村・家関係文書等、総数六千数百点）の全面的な調査・整理を行なった。八七年からは藤井を中心に鈴木を加えて研究会が発足し、佐治家文書のうち小堀政一関係文書について校訂および補足調査が続けられた。こうした長年にわたる調査・研究のうえにたつて公刊されるに至ったのが本書である。

本書は、佐治家伝来小堀政一関係文書を三部にわけて翻刻・収載している。

第一部は、慶長から正保年間の書状類である（一三八点）。①慶長期のものは、そのほとんどが駿府年寄衆や片桐且元などから政一へ宛てられた書状類である。大久保長安や板倉勝重、本多正純・村越直吉・成瀬正成・安藤直次等、当該期幕府政治を担った主要政治家が名を連ねる書状類は、すでに幕藩制国家論研究等のなかで注目・活用されてきた史料も含み、なお多くの論点を提供するであろう貴重な史料群である。

②元和期のものは、備中国の国奉行として政一が家臣に宛てた書状が中心である。元和三年、播磨姫路城の池田光政が因幡鳥取城に移ったことに伴い、鳥取の池田長幸は備中松山城へ、因幡若桜城の山崎家治は備

中成羽へ移ることとなった。この転封にかかわっての備中の国内支配に関する内容が中心をなしている。③寛永・正保期のものは、政一が家老小堀権左衛門に宛てた書状が大半を占める。内容的には、近江国奉行、また伏見奉行として、あるいは上方の公事訴訟を預るいわゆる八人衆の一員として、

さらには近江国内に所領をもつ一領主として、多様な立場から多岐にわたる内容となっている。たとえば寛永飢饉、キリシタン禁圧、禁中作事や伏見町政に関するもの、さらには朝鮮通信使来朝関係等々。書状の多くの場合、政一は江戸詰であり、同じく上方支配に関わっていた五味豊直らとの職務連携のありようなども窺うことができよう。また、茶を通じた堀田正盛・酒井忠勝等幕閣との交流も断片的ながら伝えており、政務以外に茶人としての一面も垣間見ることができる。

第Ⅱ部は、卷子装された史料二点を収録する。一つは、寛永一九年（一六四二）に政一が京より江戸へ下向した際の旅日記である「宗甫道の記」「壬午紀行」とも呼ばれ、すでに紹介されているが、文言に多くの異同がある。本書収載史料は政一の孫で

ある小堀政恒（慶安二―元禄七年）の書写になるものである。もう一つは、古田織部の「茶道百ヶ條記」。これもすでにいくつかの写本で知られているが、本書収載のものは政一自筆の奥書が加えられている。

第Ⅲ部は、元和・寛永期の年貢勘定帳類である（二六六）。近江国をはじめとする政一支配の幕領関係を主とし、一部小堀氏知行地分を含む。いずれも、本書により初めて紹介される史料であり、近世初期の幕府財政史研究の深化に寄与するものと期待される。

さらに、巻末には、丁寧な解題（藤田恒春）と索引（人名・寺社名・地名）が添えられている。

以上、不十分ながら本書の構成と内容を概略紹介してきた。前述したように、本書収載史料の一部は、すでに東大史料編纂所架蔵写真版等により知られており、研究論文や自治体史料集などに引用・収録もされてきた。しかし、今回あらためて佐治家伝来『小堀政一関係文書』としてまとめられ、公刊されたことの意義は大きい。もちろんそれは単に、出版によって広く史料利用の便がはかられたということとどまるものでは

ない。本書刊行の前提には、多年にわたる丹念な原本調査と史料批判・校訂がなされている。とりわけ第Ⅰ部所収の書状類についていえることであるが、料紙が切紙の場合、継目が剝離して複数の紙片に分離していることも多い。これら従来は前欠や後欠等の別個の文書として扱われてきた史料について、本書では原本をもつて最大限の復元の努力が払われており、従来提示されてきた史料の形態自体を訂正するものとなっている。このことが、史料の解釈・理解に根本的な影響を与えるであろうことは論をまたない。

また、書状類はその性格上、年欠文書が極めて多いものである。重要な情報を含む文書であればあるほど、年次が判明しない折の箇痒さは誰しも経験するところであるが、年次推定を誤ることの危険性も言うにおよばない。本書では収載年欠文書のほとんどすべてについて、従来なされていた推定の訂正も含め、年次を特定している。年次推定の根拠は、各史料ごとに簡潔に注記されているが、研究会における史料批判作業の成果であろう。なお、本書編纂者のうち鈴木を除く三氏は、かつて藤井を中心と

受贈図書

(一九九七年二月十日)
(一九九七年四月七日)

Harvard Journal of Asiatic Studies

(Harvard-Yenching Institute) 56-2

アジア研究所所報(亜細亜大学アジア研究所)
八五

福建師範大学学報(福建師範大学)

一九九六・三、四

龍谷大学論集(龍谷学会) 四四九

人文地理(人文地理学会) 四八一六、

四九一

一橋論叢(一橋大学一橋学会) 一一七一

二、三

奈良史学(奈良大学史学会) 一四

史料(皇學館大學史料編纂所) 一四六

東洋学文献目録(京大人文研附属東洋学文献センター) 一九九四年度

京都部落史研究所報(京都部落史研究所)

復刊準備号①、②

寧楽史苑(奈良女子大学史学会) 四二

西洋史論叢(早稲田大学西洋史研究会)

一八

西伯(西伯社) 一

アナトリア考古学研究(財)中近東文化センター Vol. VI

神道史研究(神道史学会) 四五—

文献ジャーナル(富士短期大学出版部)

三六—六

但馬国二方郡二日市村滝川家文書—解説と目録—(帝塚山短期大学図書館)

石炭研究資料叢書(九州大学石炭研究資料センター) 一八

韓國民族文化(釜山大学校韓國民族文化研究所) 八

人文科学論集(人間情報学科編)〈文化コミュニケーション・シンポジウム〉(信州大学人文学部)

日本歴史研究(日本歴史研究会) 四

熊本史学(熊本史学会) 七〇—七三

国史談話会雑誌(国史談話会) 三七

撰大人文科学(撰南大学国際言語文化学部) 四

東北学院大学論集(東北学院大学学術研究会) 二九

法学志林(法政大学法学志林協会) 九四

一、二

西洋史学報(広島大学西洋史学研究会)

二四

よばないことかもしれない。

本書の刊行が、近世前期の政治史や文化史をはじめとする多くの分野で、研究の進展に多大の寄与をなすであろうことは疑いない。

(A5判 三九〇頁 一九九六年十二月五日
思文閣出版 八八〇〇円)

(袖田善雄)